

# デフォー『ペスト』のメモ

takaidos

A Journal of Plague Year.  
ダニエル・デフォー(1660-1731)。  
1722年発行。

平井正穂・訳。  
1973年発行。

カミュ『ペスト』を読んでから、本書デフォー『ペスト』を読むのをオススメ。

ペスト菌が発見されたのは1894年(北里柴三郎、イエルサン)。  
それ以前は正体の掴めない謎の伝染病だった。  
そのためか、カミュの『ペスト』(194X年)にあった、ペスト媒介者としてのネズミの話は一切出て来ていない。  
人から人に感染する、まったく正体不明の疫病だったのだ。  
たまたま犬、猫、ネズミは病人の悪気を付けて徘徊すると見なされて大量に殺されたのだった。

1720年にマルセイユのペストの噂を耳にして、デフォーが自身5歳(1665年)の時にロンドンを襲ったペストのことを調べて書き下ろした。  
小説中に登場する私は自分の叔父で、それを自身として当時の様子の語り手としている。

最近の調査では当時のロンドンの人口は46万人のうち7万5千人(デフォーの勘定では10万人ほど)がペストで死んだらしい。

### <目次>

(小見出し一切無し。)

1664年9月からの世情とペスト流行の大きな流れ(1664年11月～1665年年末、翌年の大火)。

### <登場人物>

わたし:叔父Henry Foe(馬具商人)の目線を語り手にした自分。

兄:  
ヒース博士:わたしの親友。医師。当時の医師は原薬からいろいろ調合した。

ジョン:パン屋。元兵隊。3人組。

トマス:帆作り。びっこの船乗り。3人組。  
リチャード:指物師。3人組。  
フォード:ロンドンから逃げて来た男女の一団。

ソロモン・イーグル:1618-1683。狂信的なクエーカー教徒。頭の上に置いたフライパンに火を入れて裸で踊りながら懺悔せよといい、やがて天罰が下ると言っていたら奥さんが真っ先に死んでしまった。

検察員  
監視人  
調査員  
内科医  
薬剤師  
外科医  
付添婦  
死体運搬人  
長老派(キリスト教プロテスタント、カルバン派の教派)  
国教会派牧師  
非国教会派牧師

以下、詐欺師たち。  
～人々の不安を煽って金を稼ぐイカサマ師たち。

妖術師  
巫女  
霊媒師  
香具師  
占星術師:星占い、予言、夢占い。  
魔術師  
偽薬師  
インチキ医師  
すり  
魔薬・魔除け・護符

死亡週報  
健康証明書

<あらすじ>

1663年、オランダでペスト流行。  
1664年、オランダで再びペスト流行の噂。  
同12月、ロンドン西部でペストによる死者発生。  
1665年、西部→東部に死者数を増しながらペスト感染地区拡大。イ

カサマ師横行。

同7月1日、市長が対応策を発表。

同8月～9月、ペストによる死者数ピークに。

以降、徐々に下火になる。感染しても治る者も出て来る。

—————

ロンドンでは終戦、軍隊解除、王室帰国、王政回復で人口が増加していた。

1664年09月、彗星。

1664年11月から12月、疫病で3名の死者が出る。

路上で半裸で「おお神よ！」と叫ぶ者、夢占いの老婆、幽霊を見たという者、

牧師は聴衆の心を昂めるよりも、かえって滅入らせるような説教をした。

教会でみんな死の心配を嫌というほど叩き込まれ、神に向かって恵みを求めることを教えようとしなかった。

さまざまなイカサマ師も出て来た。

占い師の顧客としては女中奉公や下男奉公の者が多かった。

疫病で解雇されはしないかという心配があったのだ。

同年5月初旬、疫病による死亡数がまだ下火だった頃、ロンドンから脱出しようとしたが、使用人が先に逃亡してしまったため、残ることにした。

ロンドンを出るためには市長に健康証明書を発行してもらい、行く先々で疫病にかかっていないことを証明する必要があった。

トルコ人や回教徒は宗教独特の予定説(人間の死は前もって予定されている)があるので、疫病が流行している所にも平気で出入りした。そのために多くの死者を出しがちだった。

病魔はまず人口が多く貧乏人の多い外教区で猖獗をきわめた。

同年6月、宮廷がオクスフォードに移動。

疫病流行中、宮廷はここで無事に過ごした。

同年6月下旬、市長から疫病対策発表、7月1日から命令が有効になる。

感染者の出た『家屋の閉鎖令』が発行される。

感染者の出た家は感染者といっしょに家の中に監禁されるというもの。

同年7月、疫病はロンドン西部地区中心で東部やテムズ川対岸は大丈夫だった。

7～8月、市民はロンドンからどんどん逃げ出した。

3人の男(パン屋のジョン、船乗りだったトマス、指物師)の田舎疎開

の話。

死体埋葬人や付添看護婦のひどい行状話。

カフェで飲みながら放蕩無頼、犠牲者に侮辱の言葉を投げかける男たちの話。

疫病を故意に広める者、疫病に気付かずに広めてしまう者、疫病に気付いて妻子と会うのを避けて死んで行く者、路上などで突然死んでしまう者。。。。

①物資を調達して来る奉公人によって一家が感染するケース。

②隔離病院がひとつしか無かった。もっとあれば、家屋を閉鎖して一家全滅にならずに済んだ。

パンは手に入れやすかった。

肉類は肉屋や食肉処理場で疫病が荒れ狂っていたので全然手に入らなかった。

ロンドンに残った人は家を閉めて、家の中で樹脂、松脂、硫黄、煙硝など焚いて煙で疫病を退治しようとした。

病原菌は微生物のようなもので、呼吸や毛穴から体内に入り毒のある卵を生じ血液に混じって全身を倒すというと考えられていた。

デフォーはこれを知ったかぶりであると否定。

兄が疎開したあと、その家に行くとき女性たちが兄の倉庫から帽子を持ち出していた。

無料で持って行っていいという噂があったらしい。

疫病流行と同時に大きな影響を受けた業種。

親方は仕事を辞め労働者は解雇されて路頭に迷った。

①製造業。

特に不急不要なものの製造。

②貿易。

テムズ川を遡って来る船がほとんど無くなっ貿易が止まった。

③家屋建築。

新築や修理の仕事が無くなった。

④海運業。

船乗りが失業した。

⑤人々が生活費を切り詰めた。

従僕、下男、店員、職人、帳簿係、女中が失業した。

失業した多数の労働者は教区定住権を持っていなかったもので、教区から受けられる手当も無かった。

彼らは疫病よりも飢餓と窮乏と欠乏のために倒れた。

失業者・貧乏人が暴民にならなかった理由。

- ①篤志家が寄付をした。
- ②金持ちの家に食料の貯蔵が無かった。
- ③疫病が多く、貧乏人の生命を奪った。

疫病で多くの方は8月中旬から10月中旬の2ヶ月の間に命を落とした。

死亡週報の数字は全てを拾い切れていないと信ずる。  
国教派の牧師が疎開したり死んだ教会で、非国教派の牧師が行って説教することもあった。

駅舎の構内に財布が落ちていたので観ていたら、窓際の男が一時間くらいここにあるといい、拾う事にしたが、財布の上に火薬を撒き2ヤードも導火線を引いて火を点けて焼いてから中身を取り出した。

繋留された船の上に暮らす人々もいた。  
食料など準備万端で船に乗った人たちは良かったが、食料不足で補給していて誤って感染して全滅した一家もあった。  
妻子だけ家に残して船頭の仕事で稼いだり手に入れた物資を家から離れた所に置き奥さんが取りに来ている家もあった。

家畜類は感染者の悪気を運ぶという怖れのもとに、犬4万匹、猫20万匹、莫大な数のネズミが殺された。

(P.227)

田舎に疎開する3人の男たちの話。  
風向きに気を付けて北に向かった。  
数ヶ月移動したり田舎で仮の家を作って地元の人たちに寄付してもらって暮らして12月にロンドンに帰ることが出来た。  
地元の人たちは残された空き家にはしばらく近寄らなかった。

家屋閉鎖が悪疫の伝染を食い止めるのに相当な効果があったかどうかは疑問視されている。  
監視人の目を誤魔化して家から逃亡する一家もいたし、監視人を銃などで脅したり殺したりして逃げる一家もいた。

感染はまだ健康に見える人から知らず知らずに起きて蔓延して行ったと思われる。  
検査員が来てペストと見なされても医師がそうでないという場合は、40日間の隔離期間(Quarantine)がおかれた。  
病人が出た家では残りの健康人と思われる家族は20日間、別の家屋に隔離された。

疫病流行中は教会ではお互いの宗派に対する偏見も無くなった。

隔離病院への入院にはお金が必要だったことは公衆管理における欠陥だった。

市長は市場の自由をいじするためぬ、公衆衛生が保たれているか、パン価格が適正価格で供給されているか、カマドの火が瞬時も落とされていることがないかを見て回った。  
死体は夜、埋葬地や墓地に運ばれた。

同じ疫病のはずだが人によって2種類ほどの症状があった。

- ①父親が健康体に見えて罹病していて家族が先に死んだ。
- ②食欲がないと思って医者に見てもらおうと致命的なまでに病状が進んでいた。

医師は健康人と病人の区別がつかなかった。

ヒース博士は呼吸の臭いで分かるかもしれないと言っていたが、直接吸ったら感染してしまう。当時は顕微鏡も無かった。

自分の家から出た死人がペストであると知られないようにした。  
→死亡週報の数字の信ぴょう性に影響。

ペストは外国との貿易にも影響を及ぼした。

イギリスの商品を買ってくれなくなった。

イギリスの船というだけで港に入れてくれなくなった。

トルコ領は寛大だったがスペインとポルトガルは厳しかった。

オランダとフランダース地方はイギリスの商品を安く買って、イタリアやスペインに売り捌いたりした。もちろん見つかる処罰された。

10月下旬、ペストが下火になるまで、テムズ川ではロンドン付近を避けて帰航船の一大船隊が浮かぶという光景が見られた。

市長は穀物や石炭の買い入れはうまく行くようにはかった。

ペストが下火になって来ると市民は恐れず外に出るようになり、ふつうに往来を行き来し始めた。

宮廷は貧民救済のために義援金を下賜した。

一家全滅した家の財産を一旦国庫に入れてそれを分配した。

英国国教会の者たちはペストが治ると早速、非国教派の迫害を再開した。

非国教派も国教派はペストの時に逃げたと非難した。

お互いにそういう者たちがいた。

しかし、あらゆる人間がすべて同じような信仰をもち、同じような勇気を持っているとは限らない。

人を判断する時には好意的に、しかも愛を持ってせよ、とは聖書の命じているところである。

任務遂行中に死んだ人にリストを作ろうとしたが確実な調査は一個人では出来なかった。

1666年2月ペスト終息。  
9ヶ月後にロンドン大火。

オランダとの戦争で強制的徴兵されて助かった者も多くいたが、帰国すると家族がみんな死んでいたりした。